

微小睪丸腫瘍とその経過

京都大学医学部泌尿器科学教室

加藤 篤 二

静岡県立中央病院泌尿器科

八 田 栄 造

TINY TESTICULAR TUMOR AND ITS COURSE:
REPORT OF A CASE

Tokuji KATŌ

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

Eizo HACHIDA

From the Department of Urology, Shizuoka Central Hospital

A 27-year-old man was seen with testicular pain on the left side. An induration was palpated in the testicular parenchyma. Orchiectomy was performed. There was a tumor of 1.0×1.0 cm in the testis and the pathohistological examination revealed embryonal carcinoma. Three years and nine months later, he was found to have a mass in the upper abdomen which was an inoperable retroperitoneal tumor. Despite irradiation therapy, the patient died after explorative surgery. Malignancy and metastasis seen in such a tiny embryonal carcinoma were stressed.

偶然発見された微小睪丸腫瘍で摘出後の経過を追跡した症例について記載する。

症 例

27才 男子, 1951年3月15日入院

主訴: 左睪丸痛

現症: 1949年2月に左睪丸痛のため, 当科へ来院受診したが当時睪丸副睪丸その他全く異常所見を認めなかった。1951年3月5日ふたたび左陰嚢内に疼痛を覚え3月に来院, 当時左睪丸内に小指頭大の硬結をきたし圧痛を訴えたので3月15日入院した。

所見: 体格中等度, 栄養良好, 胸部, 腹部に異常を認めず。外陰部陰茎は正常, 左睪丸内部に小指頭大の硬結を触れ, 同時に圧痛を訴える。副睪丸尾部は硬く, 副睪丸と癒着するが精管に異常はない。右側睪丸, 副睪丸, 前立腺は正常, 両側鼠径リンパ節は腫脹せず, 尿は全く正澄。

3月16日左睪丸を摘出手術した。左睪丸の断面をみるに下局に近くえんどう大で弾力性硬度を有する限局

性の中央部に出血斑を示す黄色結節を認めた。大きさ1.0×1.0 cm, 組織学的には Fig. 1, 2, 3 に示すごとく胞体境界の不明瞭で核に異型性の強い embryonal cancer という病理学的診断が下された。

その後無治療で退院して経過が不明であったが1954年患者の30才時主訴が胃部の腫瘍で本院第1外科に12月14日入院した。当時の外科主任であった荒木教授より問合わせがあったため観察の機を得た。

患者は受診の2年前より食欲が低下し体重も減少し, 時おり嘔吐があり, 脂肪食をとると下痢を訴えていたという。5カ月前より左下肢に牽引痛を訴えその頃より胃部に無痛性の硬結をきたしたが増大の傾向はなく, しかし4カ月前よりは下肢の牽引痛が強く歩行困難となって入院したという。同年12月14日開腹所見によると, 左後腹膜に左腎に接し拳大の腫瘍あり周辺との癒着強きため摘出不能にて創を閉じた。組織の生検では原発巣と同様な所見を呈した。以後11月29日より翌年2月15日までにX線照射40回をうけた。30年2月中旬では左側腹部に腫瘍を触れ疼痛も強く全身状

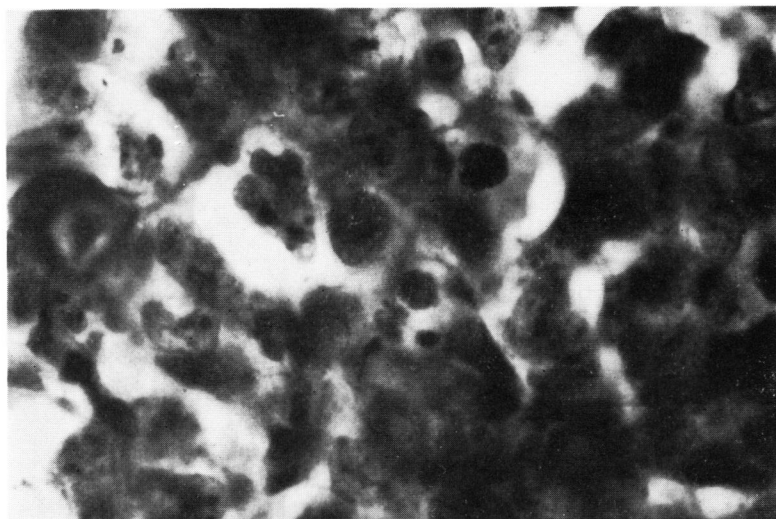


Fig. 1

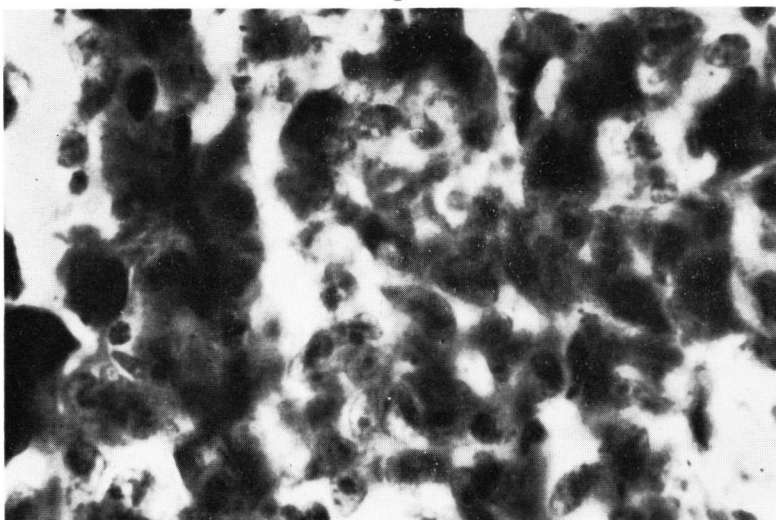


Fig. 2

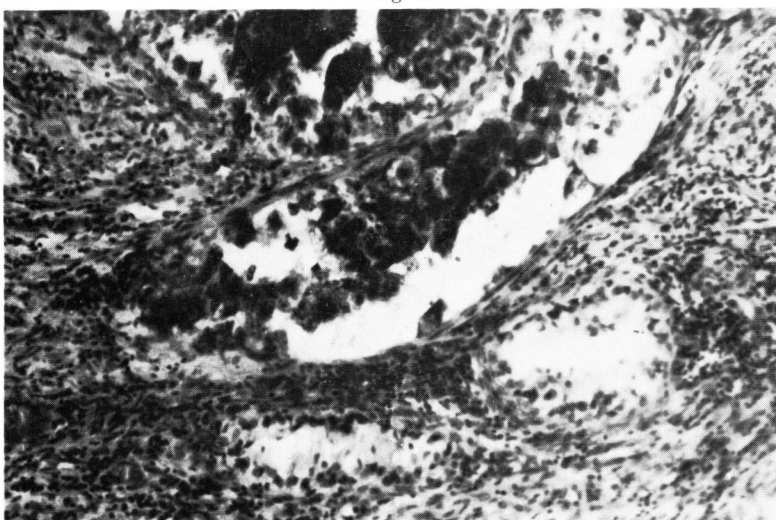


Fig. 3

態悪化し、白血球も低下し3500、同年4月29日死の転起をとった。

総括とまとめ

以上のように27才の男子で左睾丸内に微小な小結節をきたし摘出したところ embryonal cancer なることが判明した。

睾丸腫瘍は本邦の臨床ではかなり多いものであるが、そのほとんどは腫瘍が大きく、硬度の上からすでに触診で診断がつくもので、しかもその多くはすでに後腹膜その他に転移をきたしている最も悪性の腫瘍であるが、比較的早期に診断されることが少ない。これは炎症のような訴えがないためで診断が遅れる要因であろう。本邦で最も微小な腫瘍としての報告は、岡山大の中川の報告したもので最小腫瘍として2.5×1.5cmとして記載してあるが、本症例はそれよりもなお小さく1.0×1.0cmでえんどう大であった。しかしながら組織学的には悪性度が強くこの点後療法が行なわれなかった点と年齢が若いいため転移をきたし3年9ヵ月後偶然胃部の腫

瘍を主訴として外科を訪れ、後腹膜転移でX線照射も効なく死の転帰をとったものでいかに微小とはいえ睾丸腫瘍は転移度の高いものであることが痛感された。本腫瘍の本態についてはすでに多数の文献があげられ、特に転移経路は成書にあるとおりですべての癌を通じてきわめて早期より転移をきたしやすい点などもはや詳述する要もないが、その悪性度を察知する好例としてここに記述したしだいである。

文 献

- 1) Dixon & Moore : Tumor of the male sex organs. 1952.
- 2) 中川：最小なる 睾丸腫瘍，岡山医誌，53：154，1941.
- 3) 稲田：睾丸腫瘍，最新医学，20：655，1965.
- 4) J. Schnierstein : Okkulte u. Symptomarme maligne Hodentumoren. Urologe, 5 : 239, 1969.

(1969年11月21日受付)